

九ふを船が海口より前綿衣十番熱人数二千余
人といふまゝさういふ物ありて後の山にさう席をい
ふ頻あれば大ね志村九ふを常陸中に向てゆゑに
如何様今物の祈後の山に歌近付くと見え必ね討
と見えゆけり相見改まれようといふさういふ海味江
の火のも天に飛んで見ゆめいといふさういふ内
に後の山より松明数多さきなり物廻りの兵は之を
見て騒ぎさきさき丸の堀をさき越へお入りなり
必ね討つといふうちに大ね武政大音は沼の平の先
陣赤林七郎白鳥十郎殿の吊ひ軍をして一番

を攻め我と思ん人々打出さひやと喚き呼へ
切て廻る僅に八拾余人の兵もれとも一騎當千の者も筑
い大分長刀の光り域中に余りて又さきさき域中の者
周章する戦ひに標の火かりやけのかりを所を
開き堀を越え逃りさきさきをえんと志村九ふが
白旗さき攻めあり打撃さきや人々さきさき
さき戦ひたりとか火域中にはいりて度々めれ力及
落のさき空の江に幡出陣取し武政も引退を
白岩松の巻とさきに也一は控なり
去程一叫斬ハ山取の命は依りて相思ひく趣き